

第38回
中区明るい選挙推進
作文コンクール

入賞作品集



中区明るい選挙推進協議会

第38回 中区明るい選挙推進作文コンクール



「中区明るい選挙推進作文コンクール」は、大切な選挙や、選挙につながる「まちづくり」をテーマとした作文を夏休みの課題として区内在住在学の小・中学生から募集し、政治や社会の仕組みに関心を持ってもらうとともに、選挙に関する意識を社会的にも高めることを目的として、毎年開催しています。

今年度は、小学生A部門(1～3年生)に367作品、小学生B部門(4～6年生)に812作品、中学生部門に113作品、合計1,292作品もの応募が寄せられました。応募作品は、区内小・中学校教諭、中区明るい選挙推進協議会会長、中区選挙管理委員会委員長、中区长により審査され、各部門において金賞1名、銀賞2名、銅賞3名、合計18の優秀作品が選ばれました。

■小学生A部門(1～3年生)

テーマ 「わたしのまちのすきなところ」

■小学生B部門(4～6年生)

テーマ 「より良いまちをつくるために私たちにできること」

■中学生部門

テーマ 「選挙について考える」



入賞作品は中区役所ホームページにも掲載しています

<http://www.city.yokohama.lg.jp/naka/service/living/election/meisui/>

目次

― 小学生A部門（一～三年生） ―

・金賞（中区長賞）	ぼくの町をまもるヒーロー	立野小学校	三年	齋藤 陽	… 1
・銀賞	大すきな横浜の街	立野小学校	三年	相馬 有究	… 2
	ハッピーな通学路	立野小学校	三年	三崎 創太	… 3
・銅賞	よこはまにきてね	間門小学校	一年	伊藤 隼翔	… 4
	ぼくのまちのすきなところ	立野小学校	三年	土屋 諄征	… 5
	え顔あふれる通学路	立野小学校	三年	藤井 菜月	… 6

― 小学生B部門（四～六年生） ―

・金賞（中区選挙管理委員会委員長賞）	勇気の言葉	立野小学校	六年	嶋本 咲花	… 7
・銀賞	身近な人たちと仲良く	大鳥小学校	四年	柳沼 小百合	… 8
	咲う	立野小学校	五年	木村 太一	… 9
・銅賞	未来は明るく輝く	大鳥小学校	五年	荻原 杷南	… 10
	未来の横浜も美しく	北方小学校	五年	大郷 ひふみ	… 11
	私たちの未来を守るために	北方小学校	六年	田中 優香	… 12

― 中学生部門 ―

・金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞）	未来の明るい日本へ	大鳥中学校	三年	東 大地	… 13
・銀賞	社会の一員として	仲尾台中学校	一年	生井 花	… 14
	政治を知ることが選挙への第一歩	大鳥中学校	三年	川勝 彩香	… 15
・銅賞	一票の大切さ	仲尾台中学校	二年	大日方 香凛	… 16
	投票へ行く為に必要なこと	仲尾台中学校	二年	廣井 まなみ	… 17
	変わるきっかけをつくる	仲尾台中学校	三年	中山 香穂	… 18

小学生A部門

☆☆☆金賞（中区長賞）☆☆☆

「ぼくの町をまもるヒーロー」

立野小学校 三年 齋藤 陽

ぼくは、毎朝小学校に早く行きたいです。なぜかというと、山手駅前交番のおまわりさんとお話がしたいからです。

ぼくの小学校の近くには、小さな交番があります。そこが山手駅前交番です。毎朝おまわりさんはあいさつをしてくれて、おもしろい話もいっぱいしてくれます。そんなやさしいおまわりさんのことをぼくは、そんけいする出来事がおこりました。それはぼくが小学校二年生の冬の出来事です。ほうか後キッズからの帰り道に、定期けんをひろいました。そして、交番にそれをとどけに行きました。少しきんちようしながら交番に行くと、おまわりさんは大変そうなのにやさしく答えてくれました。名前や住所などを聞かれました。待ち時間に色々な話をしました。その時に、ぼくが習い事のそろばんの話をすると「そろばんがんばってね。」とおまわりさんが言ってくれました。とてもうれしかったです。そして家に帰る時におうちのひとへの連絡カードをもらって帰りました。その日の夜お母さんにそのカードをみせるとえらかったねとほめてくれました。その日の夜に、おまわりさんから電話がきました。定期けんの持ち主のおばあちゃんが見つかったという電話でした。その時に、おばあちゃんが何回もありがとうと言ってくれました。ぼくは、しあわせな気持ちになりました。

ぼくの町のすきな所はやさしいおまわりさんのいる山手駅前交番です。ぼくは、この町をまもるおまわりさんのようにこまっている人をたすけられるやさしい人になりたいです。

〈講評〉

暑い日も寒い日も、街の人たちを見守るおまわりさんは大変なお仕事です。作者とのあいさつや会話を通じて、おまわりさんも元気をもらっているのではないのでしょうか。また、定期券を落とした人は、拾ってくれた作者をヒーローだと思っていることでしょうか。困っている人を助けるときは少しドキドキするかもしれませんが、おまわりさんのように、みんながやさしいヒーローになって、もつともつといい街になってほしいと願っています。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「大すきな横浜の街」

立野小学校 三年 相馬 有究

ぼくは、今は横浜市にすんでいますますが、もともと東京で生まれました。ところが、東京は車のりようがとでも多くて空気がきたないので、はい気ガスのせいでぜんそくになってしまいました。かなりひどいぜんそくで、1才までに4回もびょういんに入りんしていたそうです。一番長い時は、十ヶ月も入りんしたそうです。あまりにひどいので、親が相談し、もう東京にはすめない、ということになり、横浜に引っこしてきました。

そして今は、横浜市中区にある、山手えきの近くにすんでいます。ぼくはこのまちがとても好きです。とくに自ぜんが多くて、子どもが遊ぶ場所がたくさんあるところ、そして丘がたくさんあるところが好きです。

たとえば、森林公園という場所はしぜんがたくさんあって、いろんなしゆるいの木や、虫やカメがいて、広場のような場所もある、とても大きな公園です。春はお花見もできます。この公園には、友達といっしょにオニゴッコをした思い出や、家族で遊んだ思い出もたくさんある、ぼくにとつてとても大切な公園です。その他に、小さな公園もたくさんあります。ぼくがすんでいる豆口台というところには、公園が4つもあるので、いつでも友達と遊べます。

そして、この辺りには丘が多いのも、気に入っています。丘があるとかけ下りられるし、何よりとても景色がいいのが好きです。ぼくの家は丘の上にたっているの、ベランダからの景色がきれいです。起きてから2かいに行つて、きれいな雲や朝日を見るのが、ぼくはとても好きです。そして丘は道が作りにくいからなのか、細くて曲がりくねつた道がたくさんあります。ぼくはこういう道も気に入っています。ぼうけんしているみたいいな気もちになるし、小さな道の道ばたに生えているお花を見るのも楽しいです。

そして何より大事なものは、横浜では、ぜんそくにならないことです。ぼくは、ここでは、安心して楽しく毎日をすごすことができます。ずっと横浜が、自ぜんが多くて、子どもが楽しめるまちでいてほしいです。

〈講評〉

近所の公園や家から見える景色、町の景観など、お気に入り場所が一つ一つ丁寧に紹介してあり、住んでいる町に対する愛着を感じる作文です。喘息を克服して、横浜の街で元気に楽しく過ごしている様子が伝わってきます。丘の上にある家のベランダから見える綺麗な雲や朝日は、作者が今日一日を頑張る活力になっているのでしょうか。自然の中で、友達と仲良く遊び、のびのびと成長していつてもらいたいものです。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「ハッピーな通学路」

立野小学校 三年 三崎 創太

ぼくの家から学校までの「ハッピーな通学路」をしようかいます。

朝、げんかんを開けると、ぼくの「おはよう！」は始まります。

まずは、おとなりさんやお向かいさんに会えたらハッピー。「おはようございませう。」ってあいさつすると、必ずニッコリ笑顔で返してくれるのがうれしいです。

続いて、まっすぐ一本道を歩いていくと、同じ通学路の友だちに会えたらハッピー。「創太、おはよう！」って名前を呼んでくれるのがうれしいです。左に曲がって坂を下ると次は階だんです。細い階だんを下っていくと、通きん、通学の人でだんだんにぎわってきます。そして、電車の線路と駅がよく見える場所に出ます。ここはぼくのお気に入りの場所。ぼくの好きな電車が数分おきにすれちがいます。トンネルの前で、「ファン！」とけい笛を鳴らしてくれる時もあります。ぼくには「おはよう！」ってきこえて、とても元気が出ます。

さあ、学校が見えてきました。その前に信号があります。あつという間に変わるから気をつけて。右、左、よく見て集中します。

最後は交番脇の階だんを上ります。このころになると、周りは小学生でいっぱいです。まるで、サケが生まれた川に帰るように、ぼくたちはぞろぞろと階だんを上ります。ゴールには先生がいてくれてハッピー。「おはよう！」と一番大きな声であいさつしてくれるのがうれしいです。

ぼくの「おはよう！」は教室に入ってからまだまだ続きます。

ぼくはハッピーな通学路のおかげで、楽しく学校に通っています。



〈講評〉

挨拶の大切さを改めて気付かせてくれる作文です。通学路で出会う様々な人との挨拶がリズムカルに繰り返され、読んでいる私たちも楽しく爽やかな気持ちになります。中区で生活する人々の生き生きとした朝の風景が目には浮かぶようですね。自分の心を開き、人と人とを繋ぐ挨拶。これからも挨拶を続けて、笑顔のあふれるハッピーな町にしてくださいね。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「よこはまにきてね」

間門小学校 一年 伊藤 隼翔

ぼくのばばは、くまもとにすんでいて、あまりよこはまにきたことがありません。だから、よこはまのすてきないちねんを、たくさんあんないしてあげたいです。はる。ほんもくのさくらまつりでは、みちのりようがわに、おおきくてきれいなさくらがたくさんさきます。よこはまこうえんには、いろいろなしゅるいのちゅうりっぷがさいていて、なんどもさんぽにいきます。

なつ。さんけいえんでは、よるにほたるをみれます。ちいさいけどきれいにげんきよくひかっています。ほんもくうみづりしせつでは、あじ、さば、いわし、このしろがたくさんつれてまいしゅうつりにいきます。

かいこうさいのはなびは、ちかくからみることができ、きれいではくりよくまんでんです。

あき。ほんもくさんちようこうえんで、いもほりができます。ぬくのがたいへんなくらいたくさんとれます。やきいもやすいーとぽてとにしてとてもおいしいです。はろういんでは、もとまちやちゅうかがいへかそうをしています。おかしがたくさんもらえてみんなたのしみになっているべんとです。

ふゆ。くりすますは、まちぜんたいがきらきらしたのしいきもちになります。まちやまんしょんでは、もちつきたいかがあります。おおきなきねでついたものは、みんなでたべるとおいしいです。

そして、ぼくがかようまかどしようもみせたいです。すいぞくかんには、かめと、さめがいます。まかどのもりでは、たあざんろうぶで、いっつもあそんでいます。じぶんでつくったすべりだいはつるつるしててたのしいです。

ぼくのだいすきなよこはまにきてください。

〈講評〉

春夏秋冬それぞれの季節のおすすめの場所やイベントが紹介されていて、横浜の素敵な一年の魅力がぎゅっと詰まった作文です。春、道の両側に咲く満開の桜はとても綺麗でしょうし、夏の夜、蛍がちかちかと光り飛び交う景色は格別でしょう。熊本のおばあさんがどの季節に横浜へ遊びに来ても、楽しんでもらえそうですね。小学校の水族館や間門の森のこともぜひ紹介してください。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「ぼくのまちのすきなところ」

立野小学校

三年

土屋

諄征

ぼくの家の近くには、大和町商店があります。その商店がいの中に、ぼくの大きなだかし屋があります。お店の名前は「おふじ」です。やさしくて、おつりの計算がとても早いおばあさんと、時どきおじいさんが、店番をしています。「おふじ」は、ぼくのお父さんが子どものころからあるだかし屋さんです。なぜぼくが、「おふじ」を大すきになったかというと、ぼくが一年生の時に、お父さんがつれてつてくれたからです。そこで、お父さんが子どものころから大すきだというだかしを、教えてもらいました。そのだかしの名前は、「チョコバット」です。値段は一本三十二円です。お父さんにすすめられて食べてみました。すると、「なっ、なんておいしいんだ！」と、かんだうするほどの味だったのです。それくらい、ぼくは「チョコバット」を買うために、おこづかいをためるようになりました。

「チョコバット」は、すこしかためのパン生地を、チョコレートでコーティングした、バットの形のおかしです。ふくろのうら側には、くじがついていて、当たりがでるともう一本もらえます。ぼくはまだ、当たった事がないので、いつか当たりに、ぜひ遊びにきてください。

「おふじ」には、「チョコバット」のほかにもいろいろなだかしが、おいてあります。何を買おうかなやみながらだかしをえらぶのも、楽しみの一つです。ぼくがまよっている、いつもおばあさんが、「何にする？」と、話しかけてくれます。お金をはらう時には、「おつりはいくらかな。」と、聞かれるので、計算のべんきょうにもなります。おばあさんとの会話も、心が温かくなります。お店はとても古いけれど、これからもかわらないで、ぼくが大人になっても、このままずっとつづけてほしいです。ぼくはだかし屋「おふじ」が大すきです。ぼくの町のだかし屋さん、ぜひ遊びにきてください。

〈講評〉

父と子の交流が微笑ましい、素敵な作文です。変わっていく町の中で、いつの時代も変わらず子どもたちを迎え入れてくれる商店街の駄菓子屋さん。駄菓子屋「おふじ」には、お父さんの子どもの頃の思い出もたくさん詰まっています。でしょうね。選ぶ駄菓子や味の好みが同じなのは、さすが親子です。お店のおばあさんとの交流も心が温まります。駄菓子屋さんへ行ってみたいくなりました。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「え顔あふれる通学路」

立野小学校 三年 藤井 菜月

わたしの町のすきな所は、通学路です。

わたしは、せい光学いんの近くにすんでいます。学校までの道のりは、クラスでも近い方です。家を出ると、家の前の道路をそうじしてくれるおじいさんがいます。そのおじいさんは、わたしが小さいころから知っています。今も毎日、元気にあいさつをしています。

せい光学いんを通りすぎると、お店がたくさん立ちならぶ所に出ます。時どき、おきやくさんと話をしに、お店の方が外に出ています。なので、一人にいる時や、いっしょに帰る友だちがいない時にお店の前を通ると、大人に見まもられているように、安心します。

お店が立ちならぶ所を通りすぎると、木かげに入ります。木かげの中で緑を横に見ながら歩いていきます。木や葉っぱが多いので、鳥や虫が集まります。あつい夏でも、すこしすずしいです。

木かげをこえてすこし進むと、いよいよ学校が見えてきます。門の前の横たん歩道では、はたふり当番のお母さんがいらっしやいます。わたしが「おはようございます。」とあいさつすると、「おはようございます。いってらっしやい。」と、あいさつしてくれます。このように、あいさつを返してもらおうと自分の話していることを聞いてくれているようで、うれしいし、元気になれます。

わたしの通学路はしぜんがゆたかで、人を大切にし、え顔でうけいれてくれる人がたくさんいます。そんな通学路が、わたしは大すきです。何年たっても明るく、え顔がたくさんある所であってほしいです。

〈講評〉

安全に学校へ行くことができるように、たくさんの人が通学路で見守ってくれているんですね。家族や商店街や町の人たちに大切にされて、元気に学校へ通う子どもたちの様子が伝わってきます。「おはようございます。」「いってらっしやい。」笑顔で交わすたくさんさんの挨拶が、町の人や子どもたちの元気の源となり、町全体を明るく活気ある雰囲気に行っているようですね。温かい町の雰囲気をこれからも守っていききたいですね。

小学生B部門

☆☆☆ 金賞（中区選挙管理委員会委員長賞）

☆☆☆

「勇気の言葉」



立野小学校 六年 嶋本 咲花

私は、より良いまちをつくるには、笑顔と言葉が大切だと思います。みなさんは、笑顔でとりかかった人に挨拶をしたことがありますか。私は、正直できたことがあります。

お母さんは中区の障がい者施設で働いています。私も夏休みに何度か一緒についていきました。弱視の方、自閉症の方、ダウン症の方がいます。皆さんそこでお仕事をしていました。その姿に驚きました。最初はどんな風に声をかけていいのかわからず、何もできませんでした。そんな自分が少し情けなかつたです。帰ってきてからお母さんは今日の様子を私に聞きました。正直に答えると、まずは笑顔で元気に挨拶すること、何かしてあげようと思わないこと、と教えてくれました。私は友だちや家族にはスラスラと話したり、笑顔で挨拶をできるけれど知らない人だとなかなか話すことができません。

次の日も作業所に行きました。お母さんが入口で「せーの。」と魔法をかけてくれました。一緒に「おはようございます。」と勇気を出して笑顔で挨拶をしました。なんだか胸がスーっとしてとつても気持ちが悪かつたです。お母さんも、となりでうなずいてくれました。中からスタッフの人や利用者さんが私の声に気づいてくれて、みんな笑顔で「おはよう。」と言ってくれました。とても嬉しかったです。その日はタオルをおる仕事を体験させてもらいました。たたみ方を間ちがえないようにゆっくりと丁寧にやりました。ふと隣を見ると丁ねいだけど手早くタオルを折る利用者さんがいます。あまり会話はできませんが作業にもなれているようです。お母さんが、あの方は絵も上手なんだよと小さい声で教えてくれました。絵を見せてもらおうと果物やアイスの絵をマーカーでかいているように心がポカポカしました。「見せてくれてありがとう。」と言うと、うなずいてくれるような気がしました。部屋に戻るとエプロンをして私に背を向けている方がいます。すぐにわかりました。後ろのリボンが終わってほしいことに。結び終わると「ありがとう。」と言ってくれました。私はこのとき、とてもすがすがしい気持ちになり、笑顔があふれてしまいました。

私は、このように笑顔になれるしゅんかんをもっと増やしていきたいです。そして言葉でもっともつと明るいまちにしていきたいです。みなさんはどのようなことが大切だと思いますか。

〈講評〉

より良い町をつくるには、笑顔と言葉（声掛け）だと作者は思っているのだが、苦手で出来ない。たぶんお母さんに相談したのでしょうか、お母さんが勤務している障がい者施設へ一緒に行き、笑顔と言葉（声掛け）に挑戦している事がよく分かりました。勇気のいる事だったでしょう。苦手な事に挑戦して、できた時の喜びや感動は倍になって還ってくると思います。そんな感動を友達や周りの人に教えてください。これからも苦手なことに挑戦して、大きな人になってください。期待しています。

☆☆ 銀賞 ☆☆

「身近な人たちと仲良く」

大鳥小学校 四年 柳沼 小百合

私は毎朝、子供新聞を読んでいきます。七月七日、岡山のおばあちゃんの家の近くに大雨がふって町がしん水してしまったことを知りました。家の二階まで水につかっている写真を見てとてもおどろきました。この家に住んでいた人はどうなったんだろう。この町の子達の明日の学校はどうなるんだろう。犬やねこは？いろんな思いが頭をかきめぐりました。もしこの横浜で同じようなことが起きたら私はどうするだろうと考えました。

例えば近所の一人暮らしのおばあちゃんの様子を見に行くことができます。テレビのニュースでも近所で声をかけ合いひなんすることができました。助かることができました。といっていた人がいました。家の前で遊んでいる時、犬の散歩で通りすぎる近所の人とあいさつすること。町内会の行事に参加して話したことのない近所の人とお話ししてみることに。近所にどんな人が住んでいるのか知っていることは大切なんだなと思いました。

私の住んでいる町の町内会では毎年ふれあいウォークという行事があつて、ふだんは通ることのない細い道を通ったりしてパスワードを集めながら目的地まで地いきの人とグループになって歩くというものがあります。この道はこんな所につながっているんだ。とかあつ、こんな所に一〇番の家がある。とか色々な発見がありました。もし地しんなどの災害でいつも通っている道が通れなかったりしたら役に立つかもしれない。このことを登校はんの下の学年の子に教えてあげようと思いました。

他にも大鳥小学校の運動会にはふれあい種目というものがあります。その種目は地いきの人や保ご者の方と一緒にミッションをクリアする種目です。その時、一緒にミッションをクリアすることで顔見知りになれて、運動会が終わっても近所で会つてあいさつできるようになりました。

また山頂公園クリーンアップラリーという行事に参加したこともあります。ちがう小学校の子やボランティアの方と一緒にごみを拾いながら歩きます。その時一緒だったグループのおじいちゃん、たおれそうな木のある場所や、近づかない方がいい急なげや、あぶないせまい道などを教えてくれました。

このように近所の人や地いきの人、身近な人たちと仲良くなることで情報を共有でき、いざという時に助け合うことができるのではないのでしょうか。こんな小さな事で町が良くなるの？と思うかもしれませんが、私にはこんな小さなことしかできません。でもぼきんでも一人一人は少ししか出せなくてもまとめると何かできるくらいたくさんのお金が集まっています。力を合わせれば小さな力も大きくなれると思います。

〈講評〉

自分の祖母の家の近くで起きた災害をきっかけに、身近な人とのつながりの大切さが書かれていました。近所付き合いが希薄になってきた昨今、災害時にご近所同士で助け合うことができたという話から、近所にどんな人が住んでいるのか知ることが大切であると気付いています。地域のボランティア活動を通して、自分のできることから始めていて、自分事としてとらえられている、街づくりの大切さに気付かされる作文でした。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「咲う」

立野小学校 五年 木村 太一

「わあー花だ。」

実はぼくは花が好きだ。花を見るとなんだか元気になり、いい香りもして自然と笑顔になる。でも、最近は公園でペしゃんにふまれている花や、そもそも花があまりない公園が多いような気がする。

ぼくは三けい園という公園に行ったことがある。三けい園は花が多くてきれいだった。次の日にサッカーをしていた近くの公園では花がむしり取られていて、

「だれがやったんだらう。きのう行った三けい園みたいに花を大事にしていたらいいんだけどな。」

と思った経験がある。ぼくはそれから花のことを考えるようになった。

調べてみたところ、中区の緑地面積は横浜十八区の中で十六位、約十四%しかないらしい。一位は緑区で、四十%以上も緑がある。なぜそんなに緑が多いのか調べてみたら、緑や花のイベントが三ヶ月に一回くらい行われていた。さらに、緑区には四季の森公園などの花が多い公園がいっぱいある。ぼくは三年生のころ、四季の森公園に遠足で行ったことがある。その時はただ、

「花がいっぱい咲いてるなあ。」

としか思わなかったが、こうやって調べてみると、なぜ花や緑が多いのかよく分かる。

中区にも花を植えるイベントはある。ぼくはまだ行ったことはないが、山下公園や横浜公園で毎年行われている。山下公園が花や緑でおおわれて、いろんな色の花を見ることが出来る。来年は参加してみようと思う。

さらに、横浜市では自分から申し出れば木の苗がもらえることを母が教えてくれた。それを聞いて、ぼくの小学校入学の時にもらってくれたら良かったのに、と思った。

ぼくは今まで知らなかったけど、また今度もらえる機会にはお願いしようと思う。そして、みんなでもをもらって植えれば、花も緑ももっと多くなる。

花や緑が多い土地に住んでいると、いいことがあることがアメリカの実験結果で分かっている。まず、がんになる確率が低くなる。ストレスかんりができるようになる。病気と戦うNK細胞という細胞を増加させる。つまり緑が多い土地に住んでいると、長生きするらしい。だから、花や緑をもっと増やせば、みんなが健康で、笑顔でいられるのだ。

ぼくは漢字を調べることも好きだから、「咲う」を「わらう」と読むことを知っている。やっぱり花が「咲く」と「笑顔」は同じなんだ。これから、花や緑がたくさん増えて、笑って健康な人が増えてほしいと思う。

〈講評〉

自分が好きな花の話から、中区の公園の緑の多さや、花が咲き美しい様子が語られている作文です。中区には、とても素敵な場所がある、行ってみたいなと思われます。自分で調べた情報をもとに、根拠に基づいて書かれています。

花や緑が多い土地に住む人は、ストレス管理や、病気への抵抗力の向上が図れることから、花や緑を増やし、健康で笑顔が増える街になってほしいという願いが伝わりました。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「未来は明るく輝く」

大鳥小学校 五年 荻原 柁南

私の家の周りでは、高れい者デイサービスの送迎車をよく見かけます。そして、私のまちは、お年寄りの方が多く暮らしています。私は、高れい化社会について考えました。お年寄りの中には、一人暮らしをしている方、介護が必要な方、デイサービスを利用していらっしゃる方がいます。「より良いまちをつくるために私たちが出来ること。」それは、私のまちのお年寄りの方が安心して暮らせて、今まで以上に笑顔で元気になってもらうことだと思います。

私は、二つのことを考えました。まず一つ目は、お年寄りの方に会ったら、「おはようございます。」や「こんにちは。」や「お元気ですか。」などと、笑顔であいさつをすることです。そうすることでみんなが笑顔になってくれます。何度かあいさつを交わし顔見知りになったら、あいさつだけでなく会話をしたいです。住んでいる所や、名前も分かれば、災害のときなど何かあったときに安心です。

私は初対面の人とあいさつをするときいつもきん張っていました。けれども、小学校高学年になり、自分からあいさつが出来るようになりました。あとは、笑顔で相手の目を見てあいさつが出来るようになります。あいさつでお年寄りの方を元気にしたいです。

二つ目は、私達小学生が地域の高れい者施設へ行くことです。施設でボランティア活動に参加して、お話相手になったり、歌や楽器演奏をしたり、本を朗読するなど役に立つことをしたいです。そうすることで、お年寄りの方にもっと元気になってほしいです。お話相手になったら、人の話をただ聞くのではなく、ていねいに相手の話を聞けるようにしたいです。それと、私は幼稚園の頃からピアノ教室に通っているので、ピアノをひくことが大好きです。施設利用者のリクエスト曲をひいて喜んでもらいたいです。この二つが私の考えです。

小学校の友達や家族とも高れい化社会について話し合い、私たちが今できることをこの先もずっと考えていきたいと思っています。小さな子供からお年寄りの方まで、みんなが助け合い、みんなが笑顔で暮らせるまちにしたいです。私のまちの未来は明るく輝き続けてほしいです。

〈講評〉

高齢者の方々との関わりから、高齢者も安心して暮らせる街とは、どのようにすればよいのか考え、自分のできることから始めている作文です。挨拶をすることの大切さ、笑顔でかわす言葉でお互いが仲良くなれることを感じています。そして、地域の高齢者施設との交流を通してこれからの活動を広げていってほしいと思います。小さな子どもからお年寄りまでが、助け合い、笑顔で暮らせる街づくりにより未来が明るく輝くと思います。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「未来の横浜も美しく」

北方小学校 五年 大郷 ひふみ

わたしは、より良いまちをつくるために三つのことを考えました。

一つ目は「ごみ」についてです。横浜市では「3R夢（スリム）」という合言葉があります。3R夢（とは、リデュース、リユース、リサイクルの3のRで3Rです。わたしは、ごみをへらしたり、使わなくなった物を捨てずに再利用することがいいと思います。どうしてごみをへらすかというところごみを燃やすことによって二さんかたんそがふえそれによって地球温だん化になってしまいます。なのでごみをへらすためには、買い物でレジぶくろを買わずにエコバックを使うなどしたらごみがへると思います。どうして使わなくなった物を捨てずに再利用するかというところ捨ててしまおうとごみがふえかんきようにわるくなってしまおうので必ず分別して出せばリサイクルして新しい物に変わります。他にもフリーマーケットで売ったり、バザーに出したら再利用ができます。

二つ目は「水」です。水もごみと同じで再利用できます。おふろの水を庭の水やりをしたり、車をあらう時にもおふろの水を利用したらいいと思います。使う水の量をへらすためには「水を出したままにしない」と「水の無駄遣いをしない」です。「水を出したままにしない」は、歯みがきをしている時やお皿をあらう時、水を出したままに見たら水の無駄遣いがないと思います。

三つ目は、「だれもが安全でまちの人が笑顔になる」です。例えば車いすの人は階段は行けないから、スロープを利用するのにそこに物が置いてあるとじゃまで通れません。なのでそこには物を置かないようにしたらスムーズに行けます。また、物が置いてある場合は、どかしてあげるなどしたら、車いすの人も困らず、安心すると思います。車いすの人と同じ様に目が不自由な人は点字ブロックをたよりにしているのに点字ブロックに物があると方向が分からなくなってしまうので点字ブロックの上には物を置かないことです。また、車いすの時と同じように物が置いてあったらどかしてあげると目の不自由な人も安心でいられると思います。次は、少しちがうパターンです。ベビーカーでは階段で上り、下りが大変なのでエレベーターを使おうとしてもエレベーターに人がたくさんいて乗れない時を実際に見たことがあります。その時は声をかけてあげて元気な人はおりてゆずってあげるとベビーカーをおしている人は楽になると思います。

これからは、ここに書いた「ごみ」、「水」、「だれもが安全でまちの人が笑顔になる」についての三つはどれもがわたしたちにもかんたんにできることです。なので、自分からこのまちをより良くするためにこの三つをがんばりたいです。

〈講評〉

よりよい街にするには、きれいなまちづくりが欠かせません。「ごみ」のない素敵な街にするための横浜市での取り組みや、水の利用の仕方、誰にでも優しい街とはどのような街なのかを考えている作文でした。すべて、自分事としてできることは何かを考え、進んで実践できることをしたいと考えています。

この三つのことは、どれも身近ですぐにできることであり、一人一人がよりよい街作りをするために意識していきたいですね。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「私たちの未来を守るために」

北方小学校 六年 田中 優香

私の住むマンションには、一階屋外にごみの集積場所があります。「燃えるごみ」・「燃えないごみ」・「プラ」・「ダンボール」・「紙類」・「缶／ビン／ペットボトル」と項目毎にコンテナが分かれていくスペースです。

ある日ごみを捨てに行くとき、マンションの美化の為に働いて下さっている方がいました。その方は出されたごみがきちんと分別されているか仕分け作業をしたり、集積場所の清掃をしたりしていました。その姿はとても忙しそうでした。大変そうでした。同時に「ルールを守って出して下さい。このままでは回収できません。」と書かれた貼り紙のあるごみが幾つか目に入ってきました。その後も貼り紙のあるごみはなくならず、その数は少しずつ増えていきました。

私はこの光景が忘れられず、母とごみの分け方について話しました。

まず母が市から出されている「ごみと資源物の分け方・出し方」という冊子を見せてくれました。その冊子には、母もやっているごみの分別方法や出し方が細かく記されています。

例えばペットボトルは、キャップ・ラベルは外し、中はゆすいでから出すことや、牛乳パックは中をゆすいでかわかし、開いてから出すことなどです。

私は台所に幾つものゴミ袋があったので、一つにすれば良いのと思っていたけどその理由がやっとわかってスッキリしました。次にごみを分別する必要性について説明してくれました。

今までごみの多くは焼却処理したり、埋め立て処理したりしていたそうです。でも燃やすと二酸化炭素が発生し、プラスチックを燃やすと有害なダイオキシンが発生して埋め立て地からはメタンガスが出て問題が発生しました。これらはオゾン層の破壊や地球温暖化にも大きく関わっているそうです。そこでごみをリサイクルすることで、ごみを資源化して有効活用するようになり、ごみ分別が推進されるようになったそうです。

また、ごみを分別することはもちろんごみ自体を減らす「ごみの減量」も忘れてはいけない大事なことだよ、と私に教えてくれました。

私はごみを捨てる時、
「このごみはこの種類かな。」

と確認してから捨てるようにしています。

また「本当にごみかな。リサイクルできるかな。まだ使えるかな。」と考えるようにしています。ほんの小さな取り組みかもしれませんが、この事が資源を大切にし、地域や市、県、地方、日本、世界の環境を守る一歩になると思います。

私はこの自分が今していること、これからすることなどをいろいろな人に理解してもらって、これからの私たちの未来、ずっと先の世界までも守ってあげたら良いと思います。

〈講評〉

自分の住んでいるマンションのごみ収集場所での出来事から、家族とごみの分別について話し合い、これからも住みやすい街の環境をどう守っていくのかが書かれた作文です。自分が疑問に思ったことから、なぜ、分別をするのかを地域のごみの出し方の冊子から学び、未来の街も住みやすくしたいという気持ちが強く表れています。一人一人が意識すること、人にも理解してもらうことから地球に優しい街づくりをしてほしいです。

中学生部門

☆☆☆ 金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞）

☆☆☆



「未来の明るい日本へ」

大鳥中学校 三年 東 大地

日本国民として自分の意見を政治に反映させる場、つまり政治に参加する一番身近な場所、それは、選挙です。選挙権年齢が十八歳以上に引き下げられ、より多くの人が政治に参加できるようになった今、実際どれくらいの人が投票しているのでしょうか。

総務省によると、平成二十九年十月に行われた第四十八回衆議院議員総選挙では、全体の投票率が五十三・六八パーセントでした。これは、戦後二番目に低い投票率だったそうです。僕はこれを見て、ビックリしました。十八歳以上の人は全員投票するものだと思っていた僕は、約半分の人しか政治に参加していないというのは、信じられませんでした。なぜこんなに投票率が低いのかと疑問に思い、年代別の投票率を見てみると、十歳代が約四十・五パーセント、二十歳代が約三十三・九パーセント、三十歳代が約四十四・八パーセントと、この三つの年代の投票率が極めて低いことがわかりました。僕は、若い人たちは選挙、政治に関心がないのかな、と思いました。政治に参加する、という実感が湧かず、自覚が足りなくて、投票しなくていいや、と思う人が多いのではないかなと思います。こんな現状を変えるには、今の僕たちの年頃、つまり小中学生の頃から政治、選挙についてある程度の情報を仕入れておくべきだと思います。そして「やたら十八歳くらいになったときに「選挙とかよくわからないからいいや」ではなく「やっとな選挙に参加できる」と、情報があるからこそ参加したいと思う人が増えるのではないのでしょうか。

しかし、投票率が上がればそれでいいのか、と言われると、僕はそうではないと思います。

僕は学校の生徒会選挙で、会長候補者の応援演説をやり、投票される側として選挙に参加しました。立候補者はやはり皆、自分に投票してほしいという思いからそれぞれの長所、強みを前面に押し出し、自分の短所、弱みにはいっさい触れません。僕も実際、その会長候補者の良い所だけをアピールしました。そういう中で一人に決めなければいけない、つまりこの人が当選したときのメリット、デメリットを自分で考えないといけないのです。さらに良い学校にするには誰が適切か、さらに良い国にするには誰が適切かを考えて、自分で判断し、投票する。これを一人一人が意識すれば、さらに意味のある、未来につながる選挙になると思います。

僕は十八歳になったら、絶対投票しに行きます。日本国民なら、日本の未来のために、政治に参加するべきだと思うからです。より良いクラスをつくりたい、と誰でも学生のとくに一度は思ったことがあると思います。それを、もう少し大きく、より良い国をつくりたい、と思えば、選挙に参加しない訳にはいきません。少しでも明るい日本の未来をつくるために、今できる何かを、全力で頑張ります。

〈講評〉

中学生部門では、読みごたえのある作文が多くあり、皆さんが投票に参加することの大切さにふれている力作ぞろいでした。中でも金賞に選ばれたこの作品は、生徒会選挙応援演説者として参加した体験から、候補者のアピールをどのように見きわめて、適切なふさわしい候補者を選ぶことの大切さとその努力が明るい日本の未来のために必要であることを表現してくれました。これまで何度も、国民の三大権利としての「参政権」を行使している私たちにも、改めて考えさせられる視点が含まれていると思えました。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「社会の一員として」

仲尾台中学校 一年 生井 花

6年後、18歳になり選挙の投票に行っているだろうか。

私が選挙に興味を持ったのは、小学生の頃だった。家の人が投票するために、投票所となっている学校についていたり、政見放送を一緒に見たりしていた。

投票所となっている学校についていった時に、若い人をあまり見かけず高齢の方がとても多いと感じた。データを見てみると、60代、70代の方の投票率が若い人より多いことがわかった。「なぜ若い人は投票をあまりしないのか。」が気になり、ニュースを見たり、考えてみたりした。ニュースを見てみると、「立候補者の選び方がわからない」ことや、「投票所に行くのが大変」など、色々なことがわかった。

60代、70代の方の投票率が多い理由も考えてみた。政治について思いを持ち、選挙について興味があるから投票をし、60代、70代の方の投票率が高い一つの理由だと考えた。積極的に社会の一員として、選挙に行く若い人達が増えれば、将来の暮らしも変わるのではないかということも思った。

小学校の頃、行事の仕事などに立候補をしたりするのが私は好きだった。

クラスの何人かの人や、学級委員に立候補をし、多数決で選ぶのも好きだった。「仲の良い友達だから選ぶ」や「意気込みは聞かないで、なんとなく選ぶ」は投票する側としてとても、いけないことだと思っていた。「責任があり、一年間、頑張ってもらえる人」を意気込みなどを聞き、じっくり選んだ。

友達にも、選び方について聞いてみると私と同じ選び方だった。

この、「責任感があつて、しっかりと頑張つて役割を果たしてくれる人」が選挙でも大切になってくると思つた。なので選び方がわからなかったりした時には、政見放送、チラシなどを見て、このことを意識しながらゆつくりと真剣に選べば良いことがわかった。将来このような地域、国になっていて欲しいという思いが心の中に少しでもあれば、投票所に行き投票をできると思つた。

18歳になった時、周りの人が選挙をあまりしていなかったら、選挙を行う大切さを教えたいと思う。

中区制100周年に向けて、もっともつと選挙の輪が広がっていくように…。

私は、これからも願い続けたい。

〈講評〉

「選挙権を得る18歳になったとき、自分は投票に行っているだろうか。」そんな自問から始まり、中学生ならではの視点で「投票」のあり方についてつづられています。幼いころ家族に連れられて投票所に行ったこと、クラスで委員を多数決で決めたことなど、子どもの普段の生活の中にも、政治に興味をもつきっかけになるような出来事がたくさんあります。未来の彼らが選ぶ政治家の姿も、彼の選んだクラス委員のように「責任感があつてしっかりと頑張つて役割を果たしてくれる人」でありますように。

「政治を知ること」が選挙への第一歩」

大鳥中学校 三年 川勝 彩香

「選挙」と聞くと私は何か堅苦しいイメージを抱いてしまう。それに私が投票したところで果たして結果が左右されるのだろうか。選挙権がない今の私にはまだ具体的な選挙の意義を見出すことが難しい。

政治の第一段階として行われる選挙だが、誰に投票したから政治がうまくいくかなんてちゃんとした確信がなければそうは言い切れないと思う。現に日本の政治はともじやないけど安定しているように思えない。だから私は正直誰に票を入れようと正解も間違いないように思えてしまう。

それに、選挙活動の際に候補者が

「私が当選した暁にはくを実行致します。」

などと口にするが一体どこまで実現できているのだろうか。

言ってしまうほどの政党であろうとやれることはそう変わらない。そのうえ物事は一向に定まらなければ批判だらけが飛びかかって健全な形にならない。国民による構成員の人選以前に政党の意向がしつかりしていなければ例え逸材が現れようと意味がないと思う。

今の私は政治に対してまだ関心が薄いため選挙の結果がどんな影響を及ぼすものなのかは分からない。でも、この作文を書くにあたって政治はいかに複雑で先を見通せない不透明な世界にあることを知ることができた。

立候補者も投票する人もそれぞれ異なる価値観がある中で政治は形成されていくものである。自分と違った意見を完全否定するのではなく一度自分の考えから距離を取り視点を変えることで相手の考えを部分的でも理解することができると思う。

かといって相手の意見に依存して期待しすぎてしまえば期待が裏切られたときに政治そのものに必要性が感じられなくなってしまうかもしれない。

政治の仕組みや課題などを単純化して工夫や新しい制度を加えればうまくいくように思えるがそれは政治の性質を把握しきれていないようにも見受けられる。

私はせっかく選挙権が引き下げられた今、生半可な気持ちで票を入れようとは思わない。投票時期に近づく、近所の人がこの人に票を入れるよう勧誘してくるが自分の意見に見合った人ならまだしもただの近所付き合いのために票を入れてしまうのは権利を放棄しているに等しいと思う。私は自分の耳で演説を聞いて自分の意思で票を入れたい。

だからこそ選挙権を得られるまでの約二年間、私はしっかり政治に目を向けていく期間にして行こうと思う。

〈講評〉

自分の政治への「無知」をしつかりと認めて論を進めているところに好感が持てる作品。一方「健全な議論」「他者の意見の受容」が政治には必要だと訴えるあたりは、我々大人も考えさせられるほどに政治の根幹を捉えています。若い世代は純粋な目で政治を見ようとしています。その目を失望で曇らせないような、魅力ある政治が求められていると思います。「私は自分の耳で演説を聞いて自分の意思で票を入れたい。」その気持ちを18歳まで持ち続けてほしいものです。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「一票の大切さ」

仲尾台中学校 二年 大日方 香凜

私の両親は選挙があると必ず投票しに行っています。他に用事がある時でも、投票だけは済ませて用事に行ったり、どうしても行けそうにない時は、期日前投票制度を利用して投票日前に投票を済ませています。私は

「用事がある時くらいは行かなくてもいいんじゃないかな。」

と思った事があり、そう伝えた事があります。すると母は

「この一票で変わることがあるから、選挙には必ず行かないと。」
と言っていました。

私の母のおじいちゃん、私にとってはひいおじいちゃんが市長だったそうです。もう亡くなっていますが、私の母が子供の頃に見ていた選挙活動の様子を話してくれました。おばあちゃんは選挙区を声を枯らしながら走り回り、時にははげまされ、涙を流しながら一生懸命選挙活動をしていたそうです。

立候補者の熱い気持ち、またそれを支える家族、応援してくれる方々の姿、それを知るとなおさら大切な一票を無駄にすることはできないと思いました。

選挙というのは、一票一票を数えていきますが、その一票の中にはひとりの人間の想いがつまっています。そう思うとさらにとっても重みのある大切な一票です。

二〇一六年から選挙権が満二十歳以上から満十八歳以上に引き下げられました。私もあと五年後から投票することが出来ます。現在若い人が選挙に関心がなく投票率が低い事が問題になっています。

そんな中、横浜市は初の「十八歳選挙」である二〇一六年の参議院議員選挙で、政令指定都市としてトップの十代投票率を上げたそうです。しかし無効投票が増えるという問題もあるようです。せつかく投票しに行ったのにその大切な一票が台無しになってしまうのはとても残念な事です。若者が政治に関心を持つことはもちろんですが、同時に選挙の仕組みについても理解する必要があると感じました。私も十八歳になるまでに、きちんと投票の仕組みについて知っておき、選挙権が与えられた時には、私の両親のように与えられた大切な権利を無駄にすることなく、必ず投票しに行きます。私も両親を見て育ったように、自分の子供に一票の大切さを教え、伝えていけるような大人になりたいと思います。

〈講評〉

「私の両親は選挙があると必ず投票しに行っています。」作品の冒頭に書かれたこの言葉が、現在の日本の投票率の低さを暗に物語っているでしょう。投票に行くのは有権者にとっては当然のことだ、という認識が、世間から消えつつあることに、中学生でさえも危機感を抱いていることが伝わってきました。子どもは親から大きな影響を受け、育っていきます。本文にあるように「自分の子供に一票の大切さを教えたい」と考えてくれるような子どもを育てることが、我々大人の責任でもあるでしょう。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「投票へ行く為に必要な」と」

仲尾台中学校 二年 廣井 まなみ

選挙は、自分にもその国に住んでいる人達にも、大切に必要なものです。しかし、中区の平成二十九年の横浜市長選挙の区別投票率は三十五・五パーセントと、横浜市平均を下回っていました。どうすれば、投票率を上げることができるのでしょうか。

選挙の日が近づいてくると、街中に多くの選挙立候補者のポスターが貼られます。私も街を歩いていると色々な所で、そのポスターを見かけます。私は最初、「選挙ポスターが貼ってあるな。」ぐらいに思っていました。しかし、そのポスターをくわしく見てみると、それぞれのポスターに違った良いところがあると分かりました。立候補者の意気込みや公約、色使いや自分の名前の載せ方にまで、工夫していて、スルーしていたら気付かないことも多くありました。「この人の公約は、実現してほしいな。」とか、「このポスターに使われている写真から、明るそうな人だな。」など、多くのことを考え、関心を持つようになりました。街中にある、身近な選挙ポスターから関心を持つてもらえると、投票率も上がると思います。

次に、若い世代の投票率についてです。約二年前に、公職選挙法が改正され、選挙権年齢が十八歳以上に引き下げられました。しかし十代（十八・十九歳）の投票率は、約三十パーセントと中区の投票率を下回っていました。なぜ、投票率は上がらないのか、そこには、選挙についてよく知らない、という面があると思います。確かに、選挙については学校ではあまり習いませんし、テレビでも普段は選挙のニュースはやっていません。選挙について知らない、誰に投票すればいいのか分からなくて、「投票のご案内」が届いてから、慌てて考えることになってしまいます。なので、自分から選挙について知ろう、と思うことが大切だと思います。選挙権をまだ持っていない、私達、中学生も選挙についての知識を持ち、約三年から六年後、選挙権を持ったときに準備万端な状態で投票に行けるようにしたいです。

投票をすることは、自分の意見を国づくりに反映でき、政治に参加できる大切なチャンスです。そして、私は約五年後、選挙権を持ちます。なので、そのときに自分で決めた一票に責任を持ち、自分の為、みんなの為、これからの未来の為に、投票に行きたいです。

〈講評〉

中区の投票率の低さを嘆き、さらにその投票率を下回る十代の若者の投票率を危ぶむ、中学生の鳴らすそんな警鐘に心打たれる作品。投票率を上げるにはどうすればよいか、有権者が選挙に興味をもつにはどうすればよいかなど、具体的な対策が論理的に示されていることも特徴的です。また、自分たち中学生も選挙についての知識をさらにつけなければならぬ、と自戒も忘れてはいません。「自分から選挙を知ろう、と思うことが大切だ」こんなふうに考えられる中学生が増えてくれることを願います。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「変わるきっかけをつくる」

仲尾台中学校 三年 中山 香穂

「この人達ってなんでこんなに必死になって呼びかけているのだろう。これで少し票が入ったくらいで何が変わるのかな。」

小学生だった私は選挙カーの上で演説する人を見て、こんな事を考えていた。選挙についての知識もなかったし、大人になっても別に投票しないでいいかな、と思っていた。私には選挙を深く知るとっかかりさえなかった。

そんな私が初めて選挙に触れたのは、中学一年生のときだった。入学して何日か経った日、委員会決めの日。黒板に書かれた委員会の中で、私の目を惹きつけたのは、小学校にはなかった「選挙管理委員会」の文字だった。

私は選挙について、何も知らなかったが、活動していくうちに知識をつけ、次第に関心をも強めていった。

そして初めての選挙活動、演説会、投票が終わり、放課後、集計をした時だった。私は驚き、同時に悲しくなった。私をそうさせたのは、あまりに多い無効票となる用紙だ。指定外の記号が書かれていたり、そもそも記入もされていなかったりと、そんな用紙が沢山あった。さらに集計を進めていくうちに私は、驚きや悲しさより、責任を感じるようになった。生徒の選挙への関心は予想以上に低い。そして、その関心を集めるのは選挙管理委員会の仕事である。また来年もこの委員会に入りたい、と思った。

二年生。二度目の選挙管理委員会の仕事。興味を持ってもらえるように、無効票を減らすために、と前年より新聞を分かりやすく書いてみたり、投票前にルールを確認するよう呼びかけたりした。私にとって二度目の集計の結果は、まだ完全ではないが確実に無効票の数は減ってきていた。

ここまでの経験の中で何度も、なんで真面目にやらないのか、と考えることがあった。そして私の中で答えが出た時、自分もそうだった、と思い出した。そのことから、興味を持つきっかけがあれば良いのではと考えた。

私の考え方を変えたのは選挙管理委員会だった。委員会に入ったのは小学校になかったからだ。こんなに些細なきっかけでも充分だったのだ。きっかけなんてものはただのスタート地点にすぎない。これは学校の選挙以外にも言える。始まりは何でも良い。大切な事は、興味を持つこと自体だ。興味を持つことは、選挙権を持つことへの責任や一票の重みを考えることに繋がり、一人一人が学校、国を思う気持ちに通じるのではないだろうか。

選挙を運営する上で大切なことは、無理矢理投票しましょう、と言うのではなく、興味を持ってもらうためのきっかけづくりだと考える。学校以外の選挙に興味を持って、皆が考え参加するようにするため、生徒会役員選挙がきっかけとなるように、選挙管理委員長として今年も頑張りたい。

〈講評〉

人が「変わる」きっかけ、それは対象への「興味」である。この作品を貫くこの考え方は、まさに言い得て妙だと思います。本人は中学校で選挙管理委員会に入っており、そのときの体験をもとに書かれた文章ですが、無効票を減らすのも選挙への「興味」であり、「興味」はたとえ些細なものだとしてもきっかけさえあれば誰でも持つ身近な話題でありながら、一貫した論理的な主張は見事です。今後の活躍を期待します。

審査をふりかえって

小学生A部門に於いては、「このまちがとても好きだ」という気持ちが伝わる文章がとても多く、皆さんの明るく前向きな想いが伝わってきました。それは自分の住むまちに対する誇りそのものであり、他の都市との比較であったり、まちのおじいさんやおばあさん、おまわりさんに対する尊敬の念であったり、形はさまざまではありますが、子どもらしいまっすぐな気持ちは我々大人を自然に笑顔にさせてくれました。

小学生B部門に於いては、福祉施設であったり、町内会であったり、公園であったり、身の回りにある公共施設がいかに自分たちの生活を豊かにしているかに気づく年頃であるのだな、という思いを抱かせ、そこから「このまちをさらに良くしていくにはどうしたらよいだろう」とアイデアを絞りつつ、明るい未来を想起している姿はとても好感が持てました。

中学生部門に於いては、選挙権年齢が引き下げられたことにより、より身近なかたちで選挙をとらえ、民主主義の至上構成システムである選挙によっていかに世の中を良くしていけるのかを真剣に考えた作文が多いことに感銘を受けました。投票する、という「一票の権利」を行使することで、世の中全体をどう変えていくか。皆さんの意見には深く頭を垂れざるを得ません。

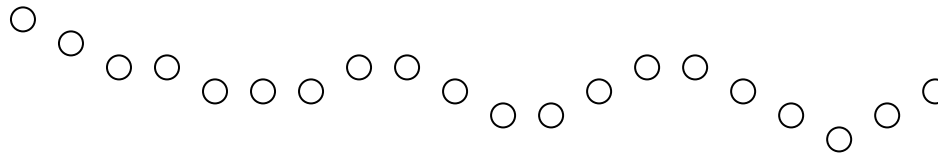
今回の審査を通じて、皆さんの前向きな明るいパワーを有意義に生かすべく、我々大人も頑張らねばならないといまふたたび痛感させられました。今回の作文を執筆したすべての皆さんに大きな拍手と称賛を贈らせていただきます。「この先の未来」に向けて、ともに力を合わせていきましょう。



■作品の選考・講評■

横浜市立立野小学校教諭	中里 優子
横浜市立本牧小学校教諭	中島 洋子
横浜市立港中学校教諭	河地 瑞彦
横浜市立港中学校教諭	國分 英幸

横浜市中区明るい選挙推進協議会会長	大村 崇夫
横浜市中区選挙管理委員会委員長	佐藤 綾夫
横浜市中区長	竹前 大



第38回

中区明るい選挙推進作文コンクール入賞作品集

平成31年1月発行

発行

中区明るい選挙推進協議会／中区選挙管理委員会／中区役所

〒231-0021

横浜市中区日本大通35番地

TEL 045-224-8117

FAX 045-224-8109

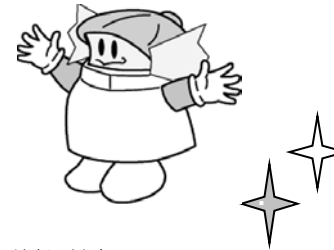


あか せんきよ
明るい選挙キャラクター
せんきよ
選挙のめいすいくん



©KUSUMI / GX and NAKA-ku

よこはましなか
横浜市中区のマスコット
スウィンギー



よこはましせんきよ
横浜市選挙のマスコット
イコットJr.